

教育現場に携わる一人として

吉 岡 順 子

1. 教師としての矜持

私は2007年3月末に閉学となった成城大学短期大学部で池上恵子先生のご指導のもと Leech, G. N. and J. Svartvik の *A Communicative Grammar of English* (Longman, 1975) を通して英語学に触れた。高校時代英文法の授業で「理屈なしに覚えなさい」と先生に言われたことに理不尽さを感じ、英語学がそれを解決してくれるのではないか、さらに学びたいという希望を胸に文芸学部英文学科に編入し、吉田正治先生に3年間ご指導いただいた。1985年に公立中学校の英語教員となり現在に至っている。

「語学の教師になるためにはその言語を知っているだけでは不十分で、少なくともそれを意識化して分析する能力が必要である。(中略) 英語の教師になるにも、英語という言語の知識を意識化し、その上われわれの場合には、それを日本語の知識と対照できる能力を身につけなければならない。」という吉田先生の言葉を折に触れ思い出し、自分に問う。先生の著書『続 英語教師のための英文法』(研究社出版、1998年)はしがきのことばである。この本から「英語教師たるもの生徒に教える教えないに関わらずこのくらいの知識を持たないでどうする」「教師としての矜持を持って」というメッセージとともに現代の言語学の成果を解説することにより現場の教員に向けてエールを送ってくださっていると感じる。

『英語教師のための英文法』（研究社出版、1994年）、『続 英語教師のための英文法』は、中学・高校の現場にいて沸いてくる英文法上の疑問点をクエスチョン・ボックス的に解説した本である。様々な論考を取り上げ、実際のリサーチ結果も交え、時には吉田先生ご自身の考えを述べられ、とてもわかりやすく書かれている。私達現場の教員は、様々な論文をエッセンスだけ取り出して読んでいる錯覚を起こす。先生が長年蓄積されてこられた研究成果を垣間見ることができ、この本を読んでいると吉田先生の講義を受けているような気さえしてくるから不思議である。

先生は『変形統語論 チョムスキー拡大標準理論解説』（研究社出版、1984年）で翻訳も手がけておられる。変形文法の世界から遠ざかってしまった私にはコメントできず申し訳ないが、難しいことをわかりやすい言葉で丁寧に相手に伝えようとする姿勢はどの著書にも一貫しているように思う。

2. 「『いる』『ある』のちがいが説明できるかね？」

吉田正治先生に初めてお会いしたのは、1982年英語学の授業だったと記憶している。病休をとられた先生の代わりに途中から吉田先生が受けもたれることになったのである。隅々まで神経を行き渡らせた英語の発音と語り口で、優しそうな外見の中にも厳しさも感じられる、というのが吉田先生の第一印象であった。英語学の授業では、Michael Swan, *Practical English Usage* (Oxford University, 1980) を学んでいた。この本には Typical mistake という項目があり、第2言語として英語を学習する人が陥りやすい間違いとその解説が載っていてユニークな構成となっている。今でもたまに手にとるが、教員になりたての頃はよく読み直していた。中学生の mistake に数多く触れてきたが、どのような傾向があるか、どうして

そのような間違え方をするのか、教え方はどうだったのか、分析もせずに20数年経過してきてしまい、吉田先生の教え子としてやり残していることが多いと実感している。

吉田ゼミに入ってもなく「日本語の『いる』『ある』のちがいを説明できるかね？」と聞かれて「『いる』は生きているもの、『ある』は無生物に使われる」と答えたが、「それではこういうケースはどう説明するのか」とさらに問われ答えに窮した。私達はふだん何気なく日本語を使っているが、吉田先生は言語を意識化して厳格に捉えることの大切さをその時示されたのだと思う。

卒論の下書きで私はよく吉田先生に「論理の飛躍」と朱書きされた。言葉をつきつめていき、妥協を許さない厳しいまなざしに十分応えることができずにいた。論理的思考力が欠如している現実を思い知るばかりだったのである。

当時吉田ゼミで継続的に読んでいた *The Grammar Book: An ESL/EFL Teacher's Course* (Newbury House Publishers, INC, 1983) は、卒業後研究授業を行うときよく読み返した。*The Grammar Book* の関係代名詞の項目を読んで *embedded sentence* の形で導入することに決めたこともあった。3年間という短い時間だったが、吉田先生から教わったことが教師としての私の根幹となっている。

3. 現場の苦悩

現在公教育そのものが揺れているが、中学校の英語教育もこの20年で様変わりした。1998年から学習指導要領により中・高で外国語が必修となり、実践的コミュニケーション重視の方向が打ち出された。言語材料の「学年指定」がはずされ、英文法は中心から周辺へと追いやられ、言語使

用場面重視の教科書が誕生した。私は当初からこの方針に懐疑的で、授業ではコミュニケーション活動も取り入れながら、文法的な指導も継続して行ってきた。外国語として英語を学習するのに英語という枠組みを理解させることは欠かせないと思うからである。

実際には自己矛盾を抱えながら英文法の指導をしている。中学2年時に **have to** と **must** のニュアンスの違いに触れながら授業をするが、中学3年になると高校受験のための英語も教えざるを得ない。3年選択英語で扱っている問題集に「2つの英文がほぼ同じ内容になるよう空欄に適語を補充しなさい」という問題があると、**must = have (has) to** と黒板に書いている自分がいる。

今年度中に改定が予定される小中高の学習指導要領では「言語力」を全教科で育成していく方針を固め、中学校の英語時数も現行週3時間から4時間に増やす方向で検討されているようである。現在年間の標準授業時数980時間を確保するために四苦八苦しているのに、次期教育課程では週当たり1コマ増やし1,015時間にすることが適当である、としている。新教育課程をめぐる現場は再び右往左往させられると予想される。

4. 師の人間性に触れて

吉田先生は、学問の師（と呼べるほど私が研究しているわけではないのだが）であると同時に第2の父親的存在である。在学中から現在に至るまで教え子である私達を気遣ってくださっている。卒論指導の時も私達学生の性格を見極め、助言・指導の仕方を変えておられた。卒論締め切り間近になり、私自身相当追いつめられていた時「君、最近食事をきちんととっているのかね」とやさしく声をかけてくださった。よほどやつれていたのだと思う。私が教育実習で研究授業をした時には杉並まで足を運んで私の

つたない授業を見てコメントしてくださった。教員になった後も研究授業の教材としてマオリ語について書いた英文を向ヶ丘遊園の喫茶店でチェックしていただくなど、若気の至りと言い訳したいことがたくさんある。

当時朝倉さん、小坂さんと私は「吉田ゼミの3人娘」と呼ばれていた。新年のご挨拶にとワインをたくさん買い込み、吉田先生のお宅にお邪魔しては奥様のおいしい料理をごちそうになった。今考えるとさぞかしご迷惑であったであろうことを何年も続けていた。その時の話題は教育関係の話・社会情勢から趣味の話など多岐にわたっていた。先生がアメリカで研究されていた時、休暇中にご家族でアメリカ横断をされた時のエピソードは大変興味深く今でもよく覚えている。

5. 私の使命

私自身教員となってから国際理解教育、カウンセリング、図書館教育、キャリア教育、福祉、授業改善、特別支援教育とその時々に必要なと思われる教育課題について研修してきた。今は、特別支援教育コーディネーターとして発達障がいやプレイ・セラピーを勉強しなければならないのだが、そろそろ原点に戻りじっくり英語教育と向き合いたいと思っている。

20数年英語教員をしてきて私が辿り着いたのは、子どもの特性や地域性を考慮した英語での「語り」である。時数が週3時間になったこともあるが、中学校英語教科書の本文は様々な題材を広く浅く載せる傾向が広がっている。教科書本文があまりにも生徒の実情とかけ離れている、と感じることも少なくない。そこで、本文に入る前のoral introductionを生徒の実情を踏まえ、自分の言葉でより詳しく行う試みを続けている。環境問題でヒートアイランド現象を扱うLessonでは、タヌキや蛍が見られ里山の風景が今もなお残っている勤務校周辺の環境についてoral introductionを

行った。教科書に見られる伝聞では何も得られない。私なりに世界を切り取り英語で「語る」ことにより深い学びが得られるのではないかと最近思うようになったのである。

授業は、様々な問いを投げかけながら子ども達の興味を喚起し、一緒に考え創り出すものである。時には強いボールを投げなくては生徒の知性も鍛えられない。教師は先人たちの思いや願いを語り継ぐ文化の伝承者であり、自分の頭で考え行動する市井の人を育てることが私の使命である、と考えている。

吉田正治先生は私達学生を一人の個として尊重し、接して下さった。先生の潔さ、誰に対しても示される公平さ、真摯な研究態度、学生に投げかけ考えさせる授業スタイルなどを残し十数年となった私の教員生活で少しでも継承していきたい。